

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K12797

研究課題名(和文) 景観変化とイメージ創造に基づいたリゾート発展モデルの構築

研究課題名(英文) Resort development based on landscape change and image creation

研究代表者

呉羽 正昭 (KUREHA, Masaaki)

筑波大学・生命環境系・教授

研究者番号：50263918

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、景観およびイメージ創造に注目してリゾートの発展プロセスのモデル化を試みるものである。研究対象は、発展の著しいオーストリア・アルプスのスキーリゾートである。具体的には、フィールドワークを通じてスキーリゾート景観の諸要素が時代の変遷とともにどのように変化してきたのか、同時にリゾートのイメージ創造がどのようになされてきたのかについて明らかにした。また、スキー場やリゾートタウンでの洗練された新しい諸施設などに基づいたイメージが定着したこと、スキー場の規模や質が重視されることが発展モデルで評価されるべき点として示された。

研究成果の概要(英文)：This study attempts to model resort development process focusing on landscape and image creation. The study subject is a ski resort of the Austrian Alps with remarkable development. Specifically, I clarified how various landscape factors of the ski resort changed with the evolution of the times through fieldwork, and at the same time how resort image was created. In addition, it was shown to be evaluated in the development model that the image based on sophisticated new facilities in ski fields and resort towns has settled and that the scale and quality of the ski resort are emphasized.

研究分野：人文地理学

キーワード：スキーリゾート オーストリア チロル州 景観 イメージ 発展プロセス スキー場

## 1. 研究開始当初の背景

観光地やリゾートの発展プロセスについては、さまざまな研究者によってその検討がなされてきた。そのなかでは、Butler(1980)による「観光地ライフサイクル理論(TALC(Tourism Area Life Cycle)理論)」が最も著名である。TALCモデルについては、今日まで多くの研究者による検討・検証がなされてきた。しかし、今日、マス・ツーリズム後のオルタナティブ・ツーリズムが重視されているが、それに基づくさまざまな新しい要素を加味したリゾートの発展プロセスについて、その一般化やモデル化を目指した研究はほとんどない。

ところで、観光地、もしくはその中でも長期滞在観光客が卓越するリゾートにとって、景観はその重要な構成要素である。すなわち、宿泊施設や飲食店、観光施設などの個々の景観によってリゾート全体のイメージが作られていく。たとえば、オーストリア・アルプスにおいて一部のスキーリゾートは、依然として著しい発展傾向にあり、観光地の発展プロセスのモデル化の研究が求められる。これと並行して、今日のリゾートでは、そのイメージ創造が重視される。伝統的なリゾートでは常連滞在客が顧客の多くの割合を占める。しかし、持続的な発展のためには、その時代や季節リズムに合わせてイメージを創造し、それをメディアなどで発信し、多様なツーリストにアピールすることが不可欠になっている。

## 2. 研究の目的

本研究は、景観およびイメージ創造に注目してリゾートの発展プロセスのモデル化を試みるものである。研究対象は、発展の著しいオーストリア・アルプスのスキーリゾートである。具体的には、フィールドワークを通じてスキーリゾート景観の諸要素が時代の変遷とともにどのように変化してきたのか、同時にリゾートのイメージ創造がどのようになされてきたのかについて解明する。これらの解明点を整理してリゾートの発展プロセスの説明モデルを構築する。

## 3. 研究の方法

本研究は、オーストリアのスキーリゾートがどのように発展してきたのかについて、景観変化とイメージ創造を拠り所として秩序付けて説明する。まず、既存の文献整理によるリゾート発展にみられる一般的特徴について検討する。

第2に調査対象地域のリゾート発展プロセスを、景観変化とイメージ創造の視点から明らかにする。対象地域はチロル州内の大規模スキーリゾートである、エッツタルのゼルデンおよびパツナウンタルのイシュグルである。そこでのフィールドワークによって土地利用・景観にみられる現在の特徴を解明する。さらに文献や過去の資料に基づいて、

過去の時点での土地利用・景観を明確にする。同時に観光協会や自治体(ゲマインデ)の専門家に聞き取り調査を実施し、イメージ創造についての情報と資料を得て、そのイメージと観光客の満足との関係、イメージと景観との関係を考える。

第3は、調査結果に基づいた理論的構築である。同時に、他地域の動向も考慮しながら、スキーリゾートの発展プロセスを説明するモデルを考え、日本のスキーリゾートへの応用を考えていく。

## 4. 研究成果

### (1)ゼルデンにおけるリゾート発展

条件の厳しい山間農村であったゼルデンでは、第二次世界大戦直後からスキー場開発が標高約1,360mの谷底から徐々に標高の高い地域、すなわち標高3,000mを超える氷河へと進む中で、宿泊者数が急増した。経済活動の中心は観光業へと移行し、景観的にもスキー場の諸施設をはじめ宿泊施設が卓越するようになった。とくに、農家や一般民家が経営する小規模ペンションが多数を占め、加えて少数の大型ホテルがみられるようになった。地区の中心部である国道の両側には、飲食店やスポーツ店、銀行、スーパーマーケット、その他の商業施設が集積し、リゾートタウンが徐々に形成されてきた。

1990年代後半になると、氷河スキー場と冬季のみ開業される一般の「冬スキー場」とが連結されることによって、スキー場の大規模化が進んだ。さらに、その後もスキーリフトやレストランなどのスキー場内の施設が継続的に更新されることにみられるように、また貯水池建設や大規模な配管工事を必要とする、人工降雪の設備が年々進むことにもみられるように、スキー場開発は常に進行している。リゾートタウンでは、アパートメント(キッチンやリビングルームのほか独立した寝室とバス・トイレをもつユニット)がスキーヤーのニーズ上昇のもとで著しく増加している。また、準高級クラスに位置づけられる4つ星ホテルの増加などサービスの質が重視された宿泊施設の高級化もみられる。同時に、洗練された飲食店やスポーツ店の増加・集積に加えて、アプレスキー(アフタースキー)施設などのサービス施設の多様化が目立っている。ゴンドラリフト山麓駅付近では、レンタルスキー需要の上昇に基づくスポーツ店立地が顕著にみられる。そこには、スキー場帰りの滞在者がビールをのどを潤すアプレスキー施設も立地している。

ゼルデンでは、伝統的な顧客であるドイツ人宿泊数は停滞しているものの、ロシアやポーランド、チェコといった東欧諸国やスイスからの新規顧客を多く受け入れて、全体としてはスキー場とリゾートタウンの発展と連動して宿泊数は継続的に増加している。地区内の人口や建物もその実数が増加傾向を示しており、スキーリゾートとして継続的な発

展がみられる。

こうした発展の基盤には、その自然条件がある。山地の標高が高いことやさらに氷河が存在することは、地球温暖化の影響を強く受けるアルプス地域においてゼルデンのスキー場が持つ有利な点である。その結果、隣接する高級リゾートのオーバーググル・ホッホググル、トレッキング基地として夏季に賑わうリゾートのフェント、スキー場はないものの安価な宿泊施設が卓越するレンゲンフェルト、同地にある大規模な温泉施設などとも連携して、エツタルの南部全体で巨大な（スキー）リゾート空間を形成するようになっている。

## (2)イシュグルにおけるリゾート発展

イシュグルもゼルデンと同様に条件の厳しい山間農村であった。1950年代までは、イシュグルからパツナウンタルをさらに遡った最奥部の村ガルテュールでのみ、トレッキング基地として観光が導入されていた。イシュグルでのスキー場開発は、オーストリア国内ではかなり遅れ、1960年代に入ってようやく開始された。その後、1970年代からドイツ人宿泊者数が急増すると同時に、住民の多くが宿泊施設経営を開始した。その結果、景観的にスキー観光に関係する諸施設が徐々に多くを占めるようになった。それに伴って地区の中心部には、飲食店やスポーツ店、その他の商業施設が集積し、リゾートタウンが形成された。

1978年になされたイシュグルとスイスのサムナウンとのスキー場連結を皮切りに、スキー場開発がより本格化した。スキー場コースが南部の地域へと拡大していき、結果として大規模なスキー場を有することがイシュグルの特徴となっていく。さらに、山麓駅に諸施設を備えたゴンドラリフト、8人乗りチェアリフトなど最新の索道設備導入が積極的になされている。また人工降雪の整備を重視し、1000基もの人工降雪機を備えるに至っている。同時に圧雪車で快適な滑降コースを提供することで、スキーヤーのニーズを満たしている。もちろん、近年ファットスキー板での新雪滑降の人気が高まっていることをうけて、圧雪車で雪を固めるコースとそうでないコースの差別化をはかっている。また人工雪の利用は、スキー場の稼働時期長期化をもたらしている。

リゾートタウンでは、大規模なホテルが中心部の外側に立地するようになり、さらに外縁部にはアパートメント立地がみられるように、宿泊施設の外延的拡大がみられる。なかでも、アパートメントの人気が高く、そのベッド数も継続的に増加している。リゾートタウン中心部にはアプレスキー（アフタースキー）施設が集積し、ドイツ人やオランダ人が、スキーを楽しんだ後に夕方からアルコールでまた楽しむとといったリゾート滞在を嗜好している。また、リゾートタウンの中心

部とその周辺では、歩行者トンネルや巨大な立体駐車場（600台駐車可能）といったインフラ整備が村当局によって盛んになされてきた。谷底地で狭い地形に基づいた不便さを克服する試みであり、滞在者の利便性上昇をもたらしている。

イシュグルにおける景観変化とイメージ創造は次の諸点で顕著にみられる。第1に、地形条件によって可能となったスキー場の拡大とサービス向上である。スイス側とリフトで連結され、また最新のサービスを提供するスキーリフト施設への更新が継続的になされている。滑降りしやすい斜面づくりといった点も重要である。第2に、ゼルデンと同様に宿泊施設の高級化がみられる点である。第3に、リゾートタウンにおけるインフラ整備の進行であり、これによってスキーヤーの便利な滞在が可能となっている。第4に、アプレスキー施設の増加による聖地化である。その名声が徐々に拡大し、イシュグルはアプレスキーのスキーリゾートというイメージが創造され、定着してきた。第5に、エルトン・ジョンやティナ・ターナーなどの世界的に著名な歌手によるグレンデコンサートを定期的（スキーシーズンに3回）に開催して知名度やイメージを向上させている。

ただし、現在、訪問者に最も評価されている点はスキー場の規模やコースであり、その点がイシュグルのスキーリゾートとしての発展プロセスに重要な役割を果たしていることが確認された。

## (3)リゾートの発展プロセスの説明モデル

ゼルデンとイシュグルに関する分析の結果、スキーヤーのニーズに合わせたスキー場内施設が整備されていること、リゾートタウンにおいてさまざまなサービス施設が整備されていること、イベントが重要な役割を果たしていることがイメージ創造に大きく関係していることが解明された。こうした発展傾向は、オーストリア国内では、ゼルファウス・フィス・ラーディス、マイヤー・ホーフエン、ザンクトアントン＝アム＝アールベルク、サールパッハ・ヒンターグレンム、オーバータウエルンなどでもみられる。いずれもスキー場の大規模化がみられ、新しい宿泊施設や関連施設でのサービス向上とともに発展している。これらのリゾートに対して、国内で高級かつ伝統的なスキーリゾートとして位置づけられるレッチ・ツュルスやキッツビューエルは、同じスキーリゾートでありながら停滞傾向を示している。こうした伝統的スキーリゾートではサービス提供のターゲットが富裕層に限られる点が、これらの違いをもたらしていると思われる。

発展しているリゾートでは、伝統的な高級スキーリゾートとは異なったプロセスや条件を有している。ゼルデンやイシュグルは共通する特徴をもち、それらが発展をもたらしている。すなわち、洗練された諸施設をもつ

スキー場やリゾートタウンにおいて、利便性の高いサービスが享受できるイメージが定着したことによって、このような発展傾向が続いていると考えられる。とりわけ重要であるのはスキー場の規模や質であり、最新のスキーリフトや人工降雪の整備を通じて、そのイメージ向上を図っている点が発展モデルにおいて評価されるポイントであると考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

##### 〔雑誌論文〕(計5件)

坂本優紀、猪股泰広、岡田浩平、松村健太郎、呉羽正昭、堤 純、オーストリア・チロル州における海外巡検の実施とその教育効果、地理空間、vol.10(2)、2017、pp.97-110(査読有)

猪股泰広、坂本優紀、呉羽正昭、山下亜紀郎、登山者からみた山岳観光地域「上高地」の意味 - 登山者の来訪特性分析を通じて -、人文地理学研究、vol.37、2017、pp.19-40(査読無)

名倉一希、甲斐宗一郎、小泉茜彩子、王汝慈、呉羽正昭、野沢温泉村におけるスキー観光の変容 - インバウンド・ツーリズムの展開に注目して -、地域研究年報、vol.39、2017、pp.65-89(査読無)

渡邊瑛季、包 慧穎、玉 小、曾 斌丹、武智玖海人、呉羽正昭、長野県飯山市太田地区におけるスキー観光地域の変化 - スキー観光停滞期の就業形態に注目して -、地域研究年報、vol.39、2017、pp.41-63(査読無)

呉羽正昭、渡邊瑛季、高原リゾート菅平の性格変化、地図中心、vol.519、2015、pp.14-17(査読無)

##### 〔学会発表〕(計3件)

呉羽正昭、日本のスキーリゾートにおけるインバウンド・ツーリズム対応、日本スキー学会第28回大会、2018

呉羽正昭、スキーリゾート・イシュグル Ischgl の発展プロセス - オーストリアにおけるスキーリゾート発展プロセスの解明 -、日本スキー学会第27回大会、2017

名倉一希、呉羽正昭、甲斐宗一郎、小泉茜彩子、王汝慈、長野県野沢温泉村におけるインバウンド・ツーリズムの展開にともなうスキー観光の変容、日本スキー学会第27回大会、2017

##### 〔図書〕(計4件)

呉羽正昭、二宮書店、スキーリゾートの発展プロセス：日本とオーストリアの比較研究、2017、223

山川修治ほか編、朝倉書店、気候変動の事典(呉羽正昭: ツーリズムと気候) 2017、pp.152-155

淡野明彦編、観光先進地ヨーロッパ -

観光計画・観光政策の実証分析-(呉羽正昭: オーストリア - アルプスのリゾートとウィーン -)、古今書院、2016、pp.117-135

浮田典良・加賀美雅弘・藤塚吉浩・呉羽正昭、ナカニシヤ出版、オーストリアの風景、2015、188

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

呉羽 正昭 (KUREHA, Masaaki)

筑波大学・生命環境系・教授

研究者番号：50263918